

実践記録

178

シリーズ

新発田の伝統文化「市民茶会」

新発田市中央公民館 井浦 尚子

1. 新発田市民茶会とは

市民茶会は、新発田市の清水園を中心会場として毎年10月の3連休の中日に行われるお茶会です。



主催は中央公民館で、共催の新発田市民文化団体連合会に加盟している茶道団体の先生方が実行委員会を組織しています。市民茶会開催の歴史はかなり古く、長きに渡りお茶に携わっておられる先生にお聞きしても、40年前には既に開催していたということを確認できたのみでした。それでも市で開催している茶会の中では群を抜いた歴史の長さで、正式な回数を把握できたらさぞかし感慨深い茶会の歴史を垣間見ることができたであろうと悔やまれます。

【今年度の概要】

日時	平成24年10月7日(日) 午前10時～午後3時30分
会場	清水園 (上の間・舞台の間・桐庵・ 翠壽庵・同仁斎・米蔵・ 武家屋敷・足軽長屋) 石泉荘 (離れ座敷)
茶席券	前売り: 2席で1,100円(当日券:1,200円)

2. 新発田の茶道と和菓子の歴史



新発田は、廃藩置県(明治4年)までの約270年間にわたって溝口侯が治め城下町として栄えてきました。歴代藩主が茶道を重んじた流れをくみ、新発田藩茶道を正しく伝承している石州流越後怡溪派をはじめとした茶道が大変盛んです。市内には清水園・石泉荘のように新発田藩の繁栄の面影を残した建造物が多くあり、引継がれています。

お茶にかかせない和菓子についても、市内に数多くある和菓子店はそれぞれ伝統と個性を持っています。茶会のお菓子は既成のものではなく、各席主と和菓子屋さんが何度も試作を繰り返して色や形・名前を決め作りますが、市民茶会会場入口では、その心づくしのお菓子を一堂に展示します。どこの席に入ろうかとお菓子を楽しげに見比べるお客さんの姿を見ると、茶道経験者以外にも広く茶会を楽しんでもらえているのかな、と嬉しく思います。

また遠方からのお客さんについては、茶会でのお菓子がおいしかったからと帰りに新発田の土産として買い求める方も多そうです。そういった意味では茶会は市の観光PRの一環も担っているのかもしれない。

3. 今年度の成果と来年度への課題

今年度の実績としては6流派9席主の参加で入席者数は延べ1,800人ほどでした。入席者数は昨年並みですが、9席は近年では最大の席数です。そのうち清水園内に8席を設けました。にじり口の正式な茶室をはじめ、武家屋敷、足軽長屋、米蔵など各部屋にはそれぞれ違った趣があり、各席主の心づくしとあいまって独特の雰囲気を出し、ひとつとして同じ茶席はありませんでした。

今年の天候は降ったりやんだりの小雨でした。席数が増えたのに入席者数が昨年並みである一番の理由かと思えます。しかし雨にしっかりとぬれた庭の木々の緑は大変美しく、晴れの日のそれとはまた違った味わい深さがありました。訪れた方も傘こそさしていましたが、歩を早めるでもなく雨独特の静けさを許容しているようにも思えました(裏方としては雨は涙がでそうなくらい残念でしたが…。てるてる坊主への祈り方が足りなかったのかも知れません)。

また、今年は清水園から徒歩で5分の石泉荘離れ座敷を初めて会場に加えしました。石泉荘は国の登録有形文化財になっており、普段は予約制で見学可能です。当初は徒歩5分という距離がネックになり人が流れないのでは?と心配しましたが、茶席券のみで見学とお茶をいただけるからと予想以上のにぎわいと反響がありました。むしろ一時入場制限をかけた方がいいのでは?という話がでるほどだったので、待合・雨対策等来年度への課題にしたいと思います。

4. 心がけていること・担当しての感想

市民茶会が市の事業の中で持つ意味を思うと、市民茶会開催には茶道人口の増加を図る目的だけにとどまらず、新発田市のよき伝統文化の継承を披露して歴史に新たな一歩を刻む、という意味合いも強いように思います。



それを頭におき「長い伝統と歴史のある茶道の重みを生かした事業展開」と、「普段なじみのない人にもお茶を楽しんでもらいたい気持ち」という、ともすると両極にあるものをいかに自然に融合させるかが、難しいけれどやりがいのある部分です。

市民茶会が、茶道経験者にとっては「日頃の稽古の披露の場」として、普段なじみのない人にとっては「気軽にお茶に接することのできる場」として成り立ち、相乗効果をもって茶会全体が盛り上がるように、よきファシリテーターでありたいと思っています。

皆さん10月3連休の中日はぜひ、新発田市民茶会へ足をお運びください。